日韓発掘調査交流に参加して

2019年５月15日から６月30日まで、日韓発掘調査交流事業により、韓国の国立慶州文化財研究所に滞在し、発掘調査に参加しました。この事業は2005年より始まり、今年で15年目を迎えます。

今回私は、世界文化遺産「慶州歴史地域」の構成要素である、月城地区の垓子（ヘジャ）と呼ばれる濠状遺構の西端、１号垓子の調査と、同じく世界文化遺産の構成要素である、皇龍寺址の調査に参加しました。これまで日本からの研究員は秋から冬の季節に参加することが多かったのですが、今回は春の参加となりました。この季節の慶州は様々な花が咲き誇り、また、大変過ごしやすい気温で、非常に快適な滞在生活を送ることができました。まさにベストシーズンと呼ぶべき季節です。

１号垓子の調査ではトレンチ（試掘溝）の壁の詳細な土層観察から、垓子の構造や変遷について、また、皇龍寺址では高麗時代の礎石等の遺構を保存しつつ、その下層に存在する統一新羅時代や三国時代の遺構について検討するため、隙間を縫って設定されたトレンチから得られるわずかな痕跡について、現場の研究員の方々と熱く議論することができました。拙い語学力でしたが、時に辞書を引き、時にスケッチを描く等して意思疎通に努め、韓国の研究者の方々もそれに忍耐強く付き合ってくださったことで大変有意義な議論をすることができました。

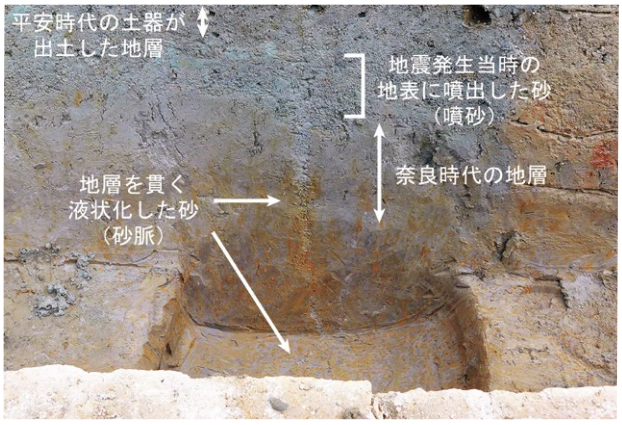
ほかにも、滞在中には瓦の調査や、山の中に数多く存在する仏教遺跡の踏査も実施し、その際にも多くの韓国の研究者の方々に大変お世話になりました。この場を借りてあらためて御礼申し上げたいと思います。秋には韓国の研究員が来日する予定です。この発掘調査交流がさらに発展することを願っています。　（都城発掘調査部　清野 陽一）

皇龍寺址での発掘調査風景（中央が筆者）

平城第612次・第613次発掘調査現場から発見された地震痕跡

近年、平城や藤原の宮・京跡の発掘調査にともなって、あちらこちらで過去の地震痕跡が発見されています。その多くは、震度５弱以上の巨大地震によって起きやすいとされる「液状化現象」の痕跡でした。

そのような中、新たに平城宮第一次大極殿院地区（平城第612次調査）や法華寺阿弥陀浄土院隣接地（平城第613次調査）において、過去の巨大地震の痕跡が発見されました。今回の発見には、注目すべき点が２つあります。１つ目は、地震によって液状化し地面を貫いて噴き出した砂（＝噴砂）が、高さ80cmほどの大きな丘状の地形（＝墳丘）をつくり、周辺に流れ出していく痕跡です。平城第612次調査の宮造営以前の地層から検出されました。その様相は、まさに現代で発生する液状化現象と同様で、発掘調査をする際に地層の中で地震の痕跡がどのように見えるのかという好事例の一つとなります。２つ目は、平城第613次調査から見つかりました。奈良時代の地層を貫いた砂が、遺構の上を覆い、その砂の上の地層からは平安時代のものと推定される土器片が出土しました。これは地震の発生時期が推定される痕跡で、史料を紐解くと、天平17（745）年、天平宝字６（762）年、天長４（827）年、承和８（841）年、斉衡２（855）年に近畿圏が地震によって被災したことが記録されています。実際の地震はこれだけではないかもしれません。しかしこのように、地域の被災履歴を丁寧に読み取ることによって、地域防災・減災に役立てていきたいと考えています。（埋蔵文化財センター　村田 泰輔）



平城第613次調査で発見された地震痕跡